

## 上海旅行記

李 錚

中国哲学専門 博士後期課程2年

2016年10月24日、上海師範大学で開催された「『寫本時代の經典』國際學術研討會」というシンポジウムに参加するため、私は秋の上海をたずねた。

現地の人は、秋は上海の一番快適な季節であると言う。寒くもないし、熱くもなく、たまに雨が降って空気もしっとりしている。そしてなにより、名物の上海蟹の季節でもある。

さてシンポジウムは、「中世時代の經典写本」をテーマとして、主に敦煌・土魯番（トルファン）写本と日本で所蔵している古典写本の研究発表が行われ、25日と26日の両日にかけて、日中の学者が最新の研究成果を報告した。

一日目の午後には、私の発表があった。「呂才と『大唐陰陽書』——兼ねて五姓法を論じて」と題し、日本で所蔵されている『大唐陰陽書』という書物の考察を行い、中世の中国で流行した「五姓法」というト占法について発表を行った。また、敦煌写本に関する

研究発表もとても興味深く、報告のあとには、他の参加者と交流して、学会の記念撮影を行った。

26日の午後は、現地でフィールドワークを行った。今回の目的地は上海博物館であった。中国三大博物館の一つに数えられる上海博物館を見学することは私の宿願であった。博物館の一階は、青銅器と彫刻品を展示しており、私も一階を中心にして見学した。青銅器は約三千年の時間を経て、今に当時の美しさを伝えている。この度は、幸い今回のシンポジウムにも出席した上海博物館の研究員にも同行していただいたため、所蔵品に関する詳しい解説を聞くことができた。歴史の重さを感じとても感動した。夕方には、近くの商店街に行き、人気のレストランで名物の上海蟹を食べた。秋の上海の美しい夜景を見ながら、昼間に見た青銅器や彫刻のことを思い出した。歴史を観察しているわたしたちもまた歴史の川の中にいるという不思議な体験だった。